

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

博物館を利用した「鑑賞」と「表現」による異文化理解教育：

4年生 工学部「願いを込めた仮面をつくろう」のとりくみから

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 優香, 八代, 健志 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001640

博物館を利用した「鑑賞」と「表現」による異文化理解教育

—— 4年生図工科「願いを込めた仮面をつくろう」のとりくみから ——

佐藤 優香

国立歴史民俗博物館

八代 健志

茨木市立葦原小学校

- | | |
|----------------------------|-----------------------|
| はじめに — 博学連携による共同研究としての単元開発 | 2 異文化理解のプロセスとしての鑑賞と表現 |
| 1 授業実践「願いを込めた仮面を作ろう」 | 3 学びの深まりと拡がり |
| | むすび — 学びを拓く協同作業 |

*キーワード：鑑賞と表現の循環，異文化理解，文化相対主義，仮面，学びのプロセス

はじめに — 博学連携による共同研究としての単元開発

学校教育における「総合的な学習の時間」の導入にともない、教科のわくをこえた学習や、学校の外とのかかわりを通じた授業づくりが注目されるようになってきた。平成15年12月に改正された学習指導要領では、総則に「学校図書館の活用，他の学校との連携，公民館，図書館，博物館等の社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携，地域の教材や学習環境の積極的な活用などについて工夫すること」との一文も加わり，学校教育における博物館の積極的な利用を進めることが示された。このような背景もあり，博物館と学校が連携して新しい授業をつくっていくことへの関心はより高まってきた。多くの博物館が，「学習」や「教育」のための仕組みづくりを始めているし，学校もまた積極的に博物館を利用することができればと考えている。しかしながら，そのかかわりの方法や博物館を利用した授業づくりは，模索の段階にあると言えるだろう。佐藤が「みんなっく」開発の際にかかわった多くの教師らも，学校の授業において積極的に博物館を利用したいと思いつつも，「博物館は敷居が高く，資料を使いこなすのは難しい」と感じていることがわかった。また，博物館側からみても，学校がどのようにして博物館を利用したいと考えているのか，学校教育における博物館利用の可能性とはいかなるものなのかを探っていかなければならないだろう。

学校教育において，博物館の既存のプログラムを利用する場合，単元とのかかわりを考慮する必要がある。しかしながら，必ずしも学校が取り入れたい内容のプログラムが，博物館に用意されているともかぎらない。博物館のプログラムを利用せずに，自由

に「調べ学習」をする場として利用した場合は、多くの児童らがどのようにして博物館にあるモノとかかわればよいのかわからずに、ただ展示場内を歩き回るだけになることになり、かえって関心を削いでしまう可能性もある。また、学校からよせられる要望に答えるべく、博物館が対応の幅をただ拡げていくだけでは、博物館は学校の補助機関になり、独自のリソースや学びの多様さを提供する場でなくなってしまう危惧もあるのでないだろうか。

子どもたちの学びを豊かにするために、学校教育において、いかにして博物館を活かしたものとして授業に取り入れるのかを探っていかなければならない状況にあると言えるだろう。そのためには、学校や博物館のそれぞれが行ってきたやり方を、一方通行的に相手に提供したり望んだりするのではなく、両者がともにかかわり方そのものを作っていく必要があるだろう。博物館が持っているリソースが最大限に活用され、かつ学校教育の中にその活動が位置づけられ、そこから互いにとっての新しい学びのあり方が見いだされることが望まれると考える。

平成15年度より始まった、共同研究「国立民族学博物館を利用した異文化理解教育プログラムの開発」では、小・中学校や高等学校の教師、博物館や大学に所属する研究者など、専門や立場の異なるメンバーで議論を重ねてきた。筆者らは、この共同研究の取り組みの一環として、協働で授業実践を行う機会を得た。ここでは、博物館の既存のプログラムや、これまでの学校が蓄積してきた単元を活かしながら、新しい単元を組み立てていくことにした。既存の博物館プログラムをそのまま学校が利用するのではなく、学校の取り組みに博物館が見学の部分だけを協力するのではなく、お互いが対等の立場で共に学びを拓いていくことを目指した。本稿は、八代が小学校教諭として、佐藤が博物館スタッフとして協働で行った、国立民族学博物館を利用した4年生図工科の「願いを込めた仮面をつくらう」の実践の報告と考察である。


1 授業実践「願いをこめた仮面をつくらう」



1. 単元名（活動名） 願いを込めたお面をつくらう	
2. 対 象：茨木市立葦原小学校 4年 授業者：白石恵子, 片平幾子, 川野香織(4年生担任) 八代健志 (図工専科) 佐藤優香 (GT, 博物館外来研究員)	3. 展示および資料との 関連 国立民族学博物館 常設展示場全域 (仮面)
4. 教科領域との関連性：図工科 学習指導要領「2内容—A表現—(2)見たこと, 感じたこと, 想像したことを絵や立体に表したりつくりたいものをつくったりするようにする。—A表したいことを表すために, 形や色, 材料などを生かし, それらの組み合わせの感じに関心をもち, 美しさや用途などを考え, 計画を立てるなど工夫して表すこと」	桜美林大学草の根国際理解教育支援プロジェクト教育キット (仮面15点) (民博ビデオテーク…利用を計画していたが, 時間の都合で使用せず)
5. 実施時期：2004年10月～12月	6. 総時数：21.5時限
7. 単元（活動）目標： [知識理解目標] さまざまな国や地域に, さまざまな仮面があるが, それら形状にはそれぞれの人びとの暮らしに基づく願いや思いが込められているのだということを知る。 [技能目標] 自分の願いを込め, より工夫をこらした仮面をつくる。 [態度目標] 鑑賞の対象となる仮面のつくり手や使い手のことを尊重することができる。	
8. キーワード 文化相対主義, 仮面, 宗教, 芸能	
9. 単元について (教材観・単元設定の理由・民博活用の視点など) 本実践は, 小学校においてこれまでも図工科の教材として採用されてきた「仮面づくり」を, 博学連携を通して新しい視点で計画・実施することを試みるものである。 仮面づくりは, 葦原小学校だけでなく, 多くの小学校において造形表現のために取り組まれている教材のひとつである。本実践においては, 仮面を作成するための技術の習得と, より工夫を凝らした意匠による表現のための「形」としての仮面を制作するのみにとどまらず, その表現に意味をもたせることを目指したい。世界の様々な地域の仮面をじっくり観て, そのモノが持つ意味や作り手に思いをはせること, また実際に自分でも仮面をつくってみることを通して, 文化相対主義にもとづく異文化理解教育のための試みとして仮面づくりの実践を位置づける。また, 博物館における鑑賞の後に制作し, 仮面完成後に再度鑑賞を行う。そのため, 「みること」と「つくること」を往き来することで, 相互の活動がより意味深いものになることが予想される。	

ここで、「仮面」とはなにかということを確認しておきたい。吉田憲司著『みんなく発見6世界の仮面』（2001）によれば、「仮面とは、文字通り、生身の人間の顔に別の顔をつけて、もとの人間とはちがう存在になろうとする道具、つまり変身の道具である」と定義されている。そして、日本もふくめ世界中にはさまざまな仮面があるが、それらの多くは、祭りや儀礼において用いられる。祭りや儀礼で仮面をかぶって登場する踊り手は、特定の個人としてそこに迎え入れられるのではなく、神や精霊として迎え入れる。

10. 展開計画・展開記録

次・時	主な学習活動と子ども（学習者）の意識	○留意点
1・1 (0.5)	<p>◆博物館でなにをするんだろう？</p> <p>校外学習の説明の際に、仮面の写真をみる。手にとって触ることのできる資料として用意した仮面のうち3点の写真を実物大にひきのばしたものをみる。</p>	<p>[校外学習の前日に学年児童全体で教室にて]</p> <p>民博の見学にたいして、興味を持つように。</p>
・2 (3)	<p>◆仮面でなんだろう？</p> <p>実物資料を観ながら、そこに込められた思いについて考える。</p> <p>代表の子ども数名が、白手袋を直用し、直接資料を持って、質感や重さを確かめたりしながら観察する。また、実物投影機で仮面をスクリーンに映し出し、全員で細部の様子を観察する。</p> <p>◆この仮面にはどんな思いがあるの？</p> <p>民博の展示場で、各自が気になる仮面を選び、そこに込められた意味や、つくり手や使い手のことを想像する。</p> <p>セミナー室にもどり、展示場内での活動のふりかえりを行う。</p>	<p>[民博セミナー室にて]</p> <p>仮面ひとつひとつに、意味があることをより実感できるように。</p> <p>それぞれの文化を尊重するという指導者の思いが伝わるように、仮面を丁寧に扱う。</p> <p>とくに、3点の資料については、その由来や意味を詳しく説明し、理解を助ける。</p> <p>[民博常設展示場にて]</p> <p>目的をもって見学が行えるようにワークシートを用意する。</p> <p>[民博セミナー室にて]</p> <p>「気づきや感想（みどり）」、「困ったこと（ピンク）」、「展示場の仮面について、自分の想像した願いは本当の願いと同じだと思う</p>

次・時	主な学習活動と子ども（学習者）の意識	○留意点
<p>2・1 (1)</p>	 <p>◆なりたい自分って？ 願いはなに？ 願いをかなえるために変身するツールとしての仮面をつくるために、なりたい自分や、自分の願い事を考える。ワークシートで制作のプランを練る</p> <p>制作プランのふりかえりを行う。</p>	<p>かそれともちがうと思うのか（きいろ）」をそれぞれの色の付箋紙に記入。</p> <p>[各学級ごとに教室にて] 前時の振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お面に込めた願いの想像を思い出して、「願い→変身」につながるように。 ・ドラえもんポケットみたいに新たな能力やモノを得るのではなく、自分の能力の増幅を考える方向に。 ・それをかぶることで「○になることができる」仮面。 <p>例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・しょんぼり→仮面をかぶると→シャキーン ・高熱にうなされる→仮面をかぶると→平熱気分爽快 ・お腹痛い？頭痛いの？ →仮面をかぶると→分かった！きみはどうしたん？しんどいの？お腹が減ってるのだ ・道に迷っちゃった→仮面をかぶると→あ、分かったこっちだ <p>「気づきや感想（みどり）」と「困ったこと（ピンク）」</p>

次・時	主な学習活動と子ども（学習者）の意識	○留意点
<p>3・1 (12)</p>	<p>◆仮面づくり 願い事をかなえてくれる自分に変身することを思い描きながら仮面を制作する。</p> <p>-1. 幅約3cmのボール紙のテープを組み合わせ、ホッチキスでとめて、仮面の骨組みをつくる。</p> <p>-2. 小さくちぎった新聞紙を骨組みの上に糊で貼り重ねる。</p> <p>-3. 小さくちぎった和紙をさらに新聞紙の上に貼り重ねる。</p> <p>-4. 仮面づくりにおけるここまでの作業のふりかえり。</p> <p>民博での活動の様子を撮したビデオを見る。</p> <p>-5. 水彩絵の具で着色する。</p> <p>-6. ニスを塗る。</p>	<p>をそれぞれの色の付箋紙に記入。</p> <p>[各学級ごとに教室にて] 制作過程においては、通常の図工科における留意点と同様。</p> <p>願いを込めた作品をつくるということを再確認するために、付箋紙に「計画ワークシートとここまでの作品をくらべて感じたこと」を記入。</p>  <p>仮面が意味をまとったものであるということを再確認する。</p> <p>制作がはやく終了した児童は、4次へ進む。</p> 
<p>4・1 (1)</p>	<p>◆この仮面にはこんな思いがあるの！ ワークシートに自分の仮面についての意味を記述することで、自分の仮面にこめた思いを整理する。</p>	<p>[各学級ごとに教室にて] 次時に、ひとりあたり5秒程度の内容で変身するシーンを録画する。その</p>

次・時	主な学習活動と子ども（学習者）の意識	○留意点
<p>・ 2 (1)</p>	<p>◆仮面で変身 仮面をかぶることで、なりたい自分に変身する様子をビデオで撮影する。モニターに写る自分の姿を見ながらひとりひとりが演技。</p>  	<p>ための演出も各自考えることができるように。</p> <p>[第二音楽室] ビデオカメラ，三脚，テープ，モニター。</p>
<p>5・1 (3)</p>	<p>◆自分の仮面，友だちの仮面，世界の仮面ビデオと実物の両方で，自分の作品，友だちの作品を鑑賞する。作品は，民博に展示してもらおう。制作を経て，再び博物館の仮面を鑑賞する。</p>	<p>[民博セミナー室，常設展示場]</p>

11. 評価計画：

1) 学習活動の様子（発話もふくむ）、2) ワークシートやふりかえりコメントの記述内容、3) 制作途上か完成かを問わず作品、の3点から以下のことをみとる。

上記の「7. 単元（活動）目標」に対応させて以下のように記載。

[知／理] …知識理解目標についての評価。

[技能] …技能目標についての評価。

[態度] …態度目標についての評価。

1次)

[知／理] 博物館内において積極的に活動することができたか。仮面の持つ願いを自分なりに想像し、ワークシートに記述できたか。

[態度] セミナー室で積極的に鑑賞できたか。資料を丁寧に扱うことができたか。展示場でマナーを守って活動できたか。

2次)

[知／理] 自分の願いを考え、そのことをワークシートにわかりやすくかくことができたか。

3次)

[態度] 願いを意識しながら制作を進めているか。

[技能] 工夫した作品ができているか。

4次)

[知／理] 自分の制作した作品の願いを説明できているか。

[態度] 自分の作品を大切に扱っているか。

5次)

[知／理] 友だちの作品の願いを理解しようとしているか。

[態度] 友だちの作品の願いを理解しようとしているか。

12. 苦勞した点・改善点

・仮面の意味を伝えるときに、その資料が本物であることが重要である。またその資料について、説明できるだけの十分な情報が入手できることが必要である。そして、授業者が「伝え手」として、それらの情報を理解した上で授業を行うことが肝要だろう。

・仮面のひとつひとつがさまざまな背景をもった意味深いものであり、中には宗教儀礼などに使用されるものもふくまれている。しかしながら、博物館の展示場での活動は、仮面の持つ意味について児童各自が自由に思いをめぐらせることであり、児童らの想像は、実際の意味から大きくかけ離れたことになる可能性もある。想像だけでははかれないさまざまな文化があることや、そのために無意識のうちにタブーを犯す危険性さえあるということを、児童らに感じてもらいたいと考えた。そこで、実物資料の扱いには細心の注意をはらった。また、児童らの自由な想像について、その真偽について考える場面を設定するなどした。

・仮面づくりを行うためには、説明や鑑賞によって理解した仮面とその願いの関係を、児童が自分のこととしてとらえなおす必要がある。仮面にたくす自分の願

を思いうかべることができるように、仮面制作の計画を行う際に、適切な例を複数提示するため苦勞した。また、ワークシートのデザインにも配慮した。

- ・仮面づくりの過程で、完成まで「願い」と「かたち」の結びつきが意識されるように、制作途中で博物館での活動をふりかえるようにした。

13. 授業づくりのための参考資料

- ・吉田憲司『みんなく発見6 世界の仮面』千里文化財団, 2001年
- ・文部省『小学校学習指導要領解説 図画工作編』日本文教出版, 1999年
- ・桜美林大学草の根国際理解教育支援プロジェクト資料キット(仮面実物資料, 写真, 解説)

14. 学びの軌跡(感想文, 作品, ノートなど)

■博物館で見学した後に児童が付箋紙に記入したコメントより

- ・仮面のデザインについて……ふしぎなお面がたくさんあった。ほとんどが意外な組み合わせの色だった▽ちがう国どうしも同じ楽器やにたおめんがあるんだなと思った
- ・仮面の意味について……お面はなんでたくさんあるのかなあ〜とおもったけど理由があってたくさんあるんだなと思いました▽いろいろな面に意味があるなんておもってなかった全部何か意味があって作られてると分かった。ほとんどがとてもキレイ▽お面にはなにかの気持ちがこもっている▽いろいろおめんがぜんぜんちがうことがわかった▽お面は全部いみがあったり, ねがいがこもっていることがわかったです▽すごいくいろいろあってちゃんと役に立ってたんだと思いました▽こわいやつもおめん
- ・使い手や作り手を慮る……いろいろなお面を見ておかしなお面やすごいお面をどんな人が作ったかどんな人がかぶったか見てみたい▽そのおめんをいつ使っているのかなって思いました▽いろんなお面があってこれは人が作っていると思うとすごいと思った。ちょっとくらい所もあってこわかった▽いろいろ心をこめてむずかしい所をいっしょうけんめいに作っていると思った▽いろんな国の人は頭がいいんだなあと思いました

■仮面制作の計画を終えて児童が付箋紙に記入したコメントより

- ・自分の願いや仮面のデザインを考えたことについて……考えるのがおもしろかった▽自分で考えて楽しかった。願いも考えて楽しかった。自分で考えたのはなんかちょっとおもしろい▽願いを考えるのが楽しかった▽お面の顔を考えるのがおもしろかった▽かたちを考えるのがたいへんだった▽はじめは, ぜんぜん想像がうかばなかったけど, いろいろ想像してうかびあがった▽えをかくのがたのしかった▽お面をどんなのにするのかがおもしろかった▽お面を書くのがこんなに難しいこととは思わなかった
- ・「仮面」と「願い」の関係について……願いがかなうといいと思った▽ねがいは, しょんぼりしているときにお面をかぶると元気になると書いて, 本当にそうなればと思った▽このお面をかぶると本当に100点がとれるようにお願いします▽本

当にそのことがかなったらいいなとおもっている

・仮面というものについて……どういうねがいかでおめんの色や形がきまる▽お面にはなにか不思議なパワーなどがあるかもしれないと思った▽お面を作るのはむずかしいと思った。おめんを作ったみなさんはいろんな願いを考えてすごいと思った

・自分がつくる仮面について……おもしろおめんにしようとおもったけどかっこいいほうがいなーとおもったから自分できにかっこよくした▽ほんとうにたちなおれるようなお面になりそうだと思います▽ほんとうになんでもできそう▽お面をがんばって作る▽おめんづくりがはやくしたい▽ぜったい作るぞ！むずかしいところもがんばるぞ

15. 備考（授業者による自由記述）

◆活動の特徴

この取り組みの特徴は、異文化理解教育を知識伝達型の授業形態や調べ学習ではなく、鑑賞と制作を往き来するような想像と創造による造形表現活動を通して行うことにある。また、造形表現活動の面からは、作品主義・技術的能力主義から解放されて、表現活動を通じてコミュニケーションを深める他者理解・異文化理解を目的とし、制作プロセスやそこでの意味づけに主眼がおかれていると言える。

それ以外にも、活動の物理的環境として、1) 世界の様々な地域でつくられた仮面を実物資料とし実際に観たり触ったりすること、2) 教室だけでなく博物館にも学びの場を求めること、3) 制作した仮面をメディアとして用い身体表現をもふくむ形態で発表すること、4) 発表の様子をビデオ撮影し映像を通して鑑賞活動を行うこと、などがあげられる。

◆学びの発展プラン

今回は、図工科での取り組みとしての実施を計画しているため、総時数にかぎりがあるということもあり、異文化理解教育として、様々な地域について調べること、知識を深めることについては、あまり時間がさかれていない。標本資料の文化的背景についても、調べるというよりも、思いをはせること想像することのみが取り入れられている。しかし、本実践の広がりとして、それらを調べたりまとめたりするためにふたたび民博を訪れることも企図している。また、変身のツールとして仮面だけでなく服も制作する、ビデオの撮影を児童ら自らが行う、変身にともない様々なポーズやおどりなどを考え表現するなど、教科を越えて様々な発展が考えられる。

2 異文化理解のプロセスとしての鑑賞と表現

本実践は、鑑賞と表現という図工科の取り組みとして行ったが、そのプロセスを通して、異文化を理解する手がかりを身につけることをめざしていた。自分たちとは異なる環境や歴史的背景を持ったさまざまな地域の仮面を鑑賞することは、表現のための「かたち」のヒントを得るためだけではない。仮面というモノを通して、そのモノの向こう

側にある思いや関係性に関心をよせたり、作り手に共感したりすることが意図されている。ここでの鑑賞がまず他者への理解と自分の作品制作のために機能し、続いて仮面制作が次なる鑑賞と他者理解のために機能していくという、「鑑賞」と「表現」の循環をもたらすことが予想された。児童らは、鑑賞や作品制作に際して、どのようなことを考えたのだろうか。授業のふりかえりとしてメモされた、彼らの思いから探っていきたい。

鑑賞をふりかえってのコメントには、仮面の持つ意味についての記述がめだつ。たとえば「お面はなんでたくさんあるのかなあと思ったけど、理由があってたくさんあるのだと思いました」とか「いろいろなお面に意味があるなんて思っていなかった」のように、一つひとつの仮面が意図を持って作られたものであることへの驚きを示すコメントがみられた。また「こわいやつもお面」との声もきかれた。これはおそらく、これまでお面とは夜店などで売られているアニメのキャラクターものしか思い浮かべることがなかったが、博物館で観た世界のさまざまな地域で作られた「こわい」ものも同じく「お面」であるという気づきであろう。そして、「いろいろお面が全然違うことがわかった」とあるように、同じ「仮面」という形態をとっていても、それらは一つひとつ意味があり、違うものなのだということを理解したようである。

作り手や使い手がどのような意味を込めているのかを慮りながら鑑賞したことにより、鑑賞の中で心に残ったこととしてそのことに関するコメントを記している児童も多くみられた。たとえば、「どんな人が作ったか、どんな人がかぶったかをみてみたい」や「いつ使っているのかなって思いました」などがそれである。そして「いろんなお面があったがこれは人がつくっていると思うとすごいと思った」というコメントもあった。「作品」を展示しているとされる美術館に比べて、博物館では展示されているモノの作り手が意識されることは少ない。しかし、このようにして「使われてきたもの」として展示物を鑑賞することで、そのモノの背後にある「人」の姿や、その「生活」へ思いをつないでいくことが可能となる。

こうした鑑賞での思いや気づきが、他者理解へと進む気配を、仮面制作におけるコメントから読み取ることができる。どのような仮面を作るのかを計画した日のふりかえりでは、いろいろ考えるのはたいへんだったとの記述がいくつも見られ、それに続いて様々な仮面を作った世界中の人たちはすごいと思ったというような感想が多く記されていた。このような感想から、鑑賞と表現を通して、児童らは仮面の意味やそこにある人の営みを自分たちなりに一人ひとり組み立てていったと考えられる。

3 学びの深まりと拡がり

学校教育における各教科、各単位には、それぞれ詳細な目標や評価の基準がある。そ

それぞれにおいて、その単元における子どもたちのゴールは定まっており、それはその単元を共有するすべての子どもに期待されている。一般的な授業においては、学ぶべきことが明細化されていると言えるだろう。そのため、学校という器のなかで子どもたちは、さまざまなことを「教えられ」「させられ」ることとなる。しかし、総合的な学習の時間などのような新しい学びの場では、活動は共有していてもそこで学びとすることは、子どもらのひとりひとりにゆだねられていると考えられることができるのではないだろうか。

本実践は、図工科の単元として取り組まれたが、児童らの経験は「図工」という単一の教科におさまりきらない多様なものであった。世界のさまざまな地域の仮面と関わることから、社会科へとつながることは明らかだろう。また、活動のフェーズごとに書くワークシートやふりかえりメモにより、児童らは言葉を用いた表現を行うことを幾度も重ねているため、国語科としての要素もある。表現は、仮面という造形や言葉にとどまらず、作品発表の身体表現もあった。加えて、複合メディアとしての博物館利用や、自らの活動をビデオ映像でふりかえるなど、さまざまなメディアを利用しているため情報教育の要素も多分にふくんでいる。こうした学びの広がりを児童自らも実感していることが、単元終了から3ヶ月後に行ったワークシートへの書き込みからうかがうことができる。この単元を通じて印象に残っていることをあげてもらったところ、仮面を作ったことだけにとどまらない多様なコメントがよせられた。

では、この取り組みにおいて児童らにもたらされた学びはいかなるものであったのだろうか。「仮面作りを通してゲットしたものはなにですか？」という問いを受けて自由に記述された彼らの言葉から考察していきたい。

○異文化理解への手がかり

やはり、仮面とはなにかということについてのコメントは多い。「お面はかぶるだけだと思ったけど、ちゃんと意味があると思った」、「こわいお面でもいい思いがこめられたお面もあった」などがそれである。「お面をどんな形にしてもできることがわかった。お面は目をあけたり目をあけなかったり、口をあけたり口をあけなくてもお面ができるとわかった」というのは、仮面がその「形」だけで仮面として成立しているわけではなく、用途や意味などの「質」が満たされていればよいとの理解だろう。博物館で目にした多様な仮面も、教室で友人らががつくっている多彩なデザインも、すべてその意味において仮面であることへの気づきは、ものごとの意味や本質に目をむけることにつながるのではないだろうか。

○「作る」ということ

「お面を作っているときに、昔の人のお面を作るにはたまひまがかかる作業だという

ことだということを知った。だからぼくもしっかり願いをこめてつくりました」というように、自分が仮面を制作する過程で、再び展示されている仮面の作り手に思いを馳せているコメントもあった。また、仮面のことにとどまらず、「お面をつくるのはすごく大変だと分かった。物を作るのは苦勞するんだ!と思った。物を大切にしようと思う」や「お面をつくってこんなに楽しいんだなあ難しいんだなあとわかった」とのように、作るということについて考えたコメントもみられた。加えて「図工でどんな気持ちも作ることができるんだなあと思った」との記述もあった。これは、形あるものを作ったり描いたりする行為によって心の中を表すことができるのだという気づきである。伝えたいことをなにかの形にたくすことを理解したと言えるだろう。

○プロセスを大切に作る

長い時数をかけて作り上げた仮面を、児童らは「とてもうまくできた」し「気に入っている」し「早くおとうさんおかあさんに見せたい」と思っているようだ。ときには「失敗したけど」と思いながらも、なぜいずれの児童もが自らの作品に満足し高く評価することができたのだろうか。

その答えのひとつは、自分だけのオリジナル作品ができた実感していることにあるようだ。「自分だけのお面がつくれたこと。自分が考えたお面を作れたこと。いろいろ想像して考えついたお面がつくれたこと。自分のアイデアがいろいろ出せたこと。時間がいっぱいかかったけどいい作品が最後までできたこと。失敗もしたところもあったけどできたこと」がこの単元で得られたことだと考えている児童がいる。このコメントによれば、彼はオリジナルなものを作ることができたのは、「よく考えた」「いろいろ想像した」ことに依ると実感している。すなわち、作品への満足感は、児童らが、制作プロセスそのものに満足しているからではないかと考えることができる。それは、この仮面作りを通して「ゲットしたもの」として、制作プロセスに関するコメントがとても多いことからわかる。「お面作りの取り組みでみんなで一生懸命やれたのが思い出です。その思い出をゲットしたので嬉しいです。勉強が思い出になりました」や「たのしい気持ち」や「お面作りでゲットしたものは、たぶんお面をつくった感想やお面だと思いません」と。

もう少しみていこう。本実践は、およそ20時間におよび、中学年図工科の取り組みとしてかなり多くの時間を割いたものとなった。その長い時数をかけて丹念に作りあげてきたことは、「いっしょうけんめいしたから、いっしょうけんめいすることがゲットできました」とコメントされたように、達成感につながったようだ。そして、「むずかしかったけどちょっと図工が好きになった」とあるように、たいへんであったり、難しかったりしたことが負の感情として記憶されていったわけではないこともうかがえる。担任教師らによれば、手間のかかる張り子制作の過程を全員が全うでき達成感を感じる

ことができるまでに継続できたのは、博物館での仮面との出会いや自分の願いを込めていることにあったのではないかとされる。

こうしたプロセスに関するコメントの中でも、印象的なのが「考えること」についての記述である。本実践では、作品としてできあがってきた仮面だけを評価するのではなく、仮面の意味について考えたり、自分なりの意味をまとった作品を作ったりと、そのプロセスを大切にしたいと考えていた。そのために、博物館の展示場で、鑑賞を追えた直後、自分の作品を作る前に、作った作品の意味を伝えるために、と活動のフェーズごとに「考える」場面を用意してきた。こうしたプロセスを経て、いく人かの児童は、たくさん仮面をみたり自分でも時間をかけてつくったりしている過程で得たのは「考えること」だと感じている。「ほかの勉強のときよりも考えたのがむつかしかったけど、いろんなことを考えられてよかった」「お面作りをしているいろんなことを考えることをゲットしたって感じました。図工が楽しいと思った」と。

児童らの言葉からも明らかなように、本実践は深く思考し、多面的な要素を持つ活動であるため、仮面作りという同じ取り組みの中からも、国語的要素を多く学びとる子どももいれば、図工的な部分で力を伸ばす児童もいるだろう。そして、こうした学びの拡がりや深まりは教科だけにおさまるものではないだろう。学びの共同体における仲間との関係や、学級におけるさまざまな事柄を成していくためのふるまいなどにも、こうした連携による学びは刺激を与えるようだ。この取り組みは、八代にとっては日常の場で行われたものであり、すでによく知る児童とのものであったが、佐藤にとってそこは非日常であり児童らともこの実践が最初の出会だった。しかし、驚きや発見は佐藤だけのものではなく、日常の場でありよく知っている児童との関わりだった八代にも様々な場面でもたらされた。こうした側面は、指導要領から引けば、特別活動の目標にある「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図るとともに、集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」にも相当するだろう。

むすび ―学びを拓く協同作業

本実践は、児童の言葉を借りれば「たくさん考える」から「ちょっとたいへんだけど」それが「楽しくて」、「一生懸命」になって、「図工が好きになる」取り組みであったようだ。

さまざまな学びの可能性をもった取り組みになった要因のひとつは、何を教えるかということから授業づくりが始まっていないからではないかと考えられる。この実践のために八代・佐藤は多くの時間を費やし何度も話し合いを行った。そこで話し合われたこ

とは、子どもたちにどのような経験の場を用意するか、何について考えてもらうか、という二点にまとめられるだろう。授業をデザインするために、その活動のフェーズごとに、子どもが何をし、何を考えるのかを問うてきた。児童らが期待されていたのは、用意された学びの素材を一人ひとりが自分なりに使いこなすことである。ここでの素材とは、博物館というリソースだけでなく、仮面作りという機会そのものであり、造形的な作品づくりにはじまり、その作品に込める意味を語ること、文章にして書いてみることで、できた仮面を身体表現を伴って説明することなど多様な表現のかたちをとることができるプロセスそのものもふくまれる。

本実践は、ひとりの教師とひとりの博物館スタッフが「授業づくり」を通して「学び」の意味を構成し合っていくことにより実現された。このような、教科・領域ともに拡がりをもったものとして、子ども達にさまざまな学びの機会をもたらすことを可能にするためには、子どもの学びを教科や評価にとらわれずにひろい視野で受け止めることのできる学習環境が必要になってくる。学校には連携によって可能となる学びの拡がりをうけとめる柔軟さが、博物館側には学びを語る言葉を持つことが、求められるだろう。博学連携による授業づくりとは、それに携わる者たちの「学び」観を拓いていくことにほかならない。

